

5000本のバラよりも、たった1本の花に心を寄せて、  
自分の星に帰っていった「星の王子さま」。  
「ほんとうに大切なものは目に見えないんだよ」と、  
私たちにメッセージを残して。  
100ヶ国以上で読み継がれている  
この悲しくも美しい作品を書いたのは、  
フランスの作家アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ。  
彼は1900年、奇しくも津田塾大学が創立された年に生まれました。  
決して平穏ではなかった人生の中から生み出された  
珠玉の『星の王子さま』は、いまでも  
私たちの心に静かな感動を与えてくれます。  
サン＝テグジュペリ自身が、  
「星の王子さま」を探していたのかも知れません。  
「星の王子さま」のあとを追うように  
空に散っていったサン＝テグジュペリに、  
21世紀を生きるあなたは  
どんな思いを伝えてくれるのでしょうか。



# 「星の王子さま」を探して—

不朽の名作を遺して空に散ったサン＝テグジュペリに手紙を書こう

## 第8回(2007年度)高校生エッセー・コンテスト募集要項

### 1 手紙形式のエッセー募集

不朽の名作『星の王子さま』を遺して空に散ったサン＝テグジュペリに、『星の王子さま』を読んであなたが感じたことや考えたことを、手紙という形式で自由に書いてみてください。

### 2 応募資格

高校生(国籍・学年・性別は問いません。)

### 3 応募方法

英語、フランス語の場合は、400words(A4判用紙)程度、日本語の場合は、1200字(A4判用紙、横書き、ワープロ・手書きいずれも可)程度。

※別紙(A4判用紙)に、氏名(フリガナ)・性別・高校名(所在県名)・学年・〒住所・電話番号を記入して、表紙として原稿に添付し、郵送してください。

### 4 募集期間

2007年7月23日(月)～9月4日(火)(消印有効)

### 5 賞金等

最優秀賞1名(賞金5万円を贈呈。10月7日(日)津田塾大学において表彰します。)優秀賞若干名(賞金1万円を贈呈。)最優秀作品は津田塾大学広報紙 *Tsuda Today* と津田塾大学ホームページに、優秀作品は津田塾大学ホームページに掲載・公表します。応募作品は返却しません。応募作品の著作権は主催者に帰属します。

### 6 入選発表

10月7日(日)までに、入選者本人に通知します。(津田塾大学ホームページには10月7日以降掲載します。)

### 7 提出先・問い合わせ先

〒187-8577 東京都小平市津田町2-1-1  
津田塾大学「高校生エッセー・コンテスト係」  
Tel: 042-342-5113 E-mail: essaycon@tsuda.ac.jp

<http://www.tsuda.ac.jp>

津田塾大学ホームページで、第1回～7回の高校生エッセー・コンテスト選考結果等を掲載しています。どうぞご覧ください。

# “Men,” said the little prince, “set out on their express trains, but they do not know what they are looking for.”

(Antoine De Saint-Exupéry 『星の王子さま』より)

第二次世界大戦の脅威が世界を覆うなか、飛行士でもあり、すでに『人間の大地』や『戦う操縦士』などですぐれた作家として評価されていたアントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、祖国フランスをあとにニューヨークで苦悩の日々を過していました。自分と静かに向き合う時間の中で、日本でも『星の王子さま』として知られる不朽の名作 *Le Petit Prince* (1943) が生まれたのでした。翌年コルシカ島の飛行場から一人乗りの飛行機で偵察の任務についたサン＝テグジュペリはそのまま行方不明となり、愛する妻コンスエロとこの不朽の名作『星の王子さま』が遺されたのでした。

砂漠に不時着した飛行士は、彼自身の姿でもあったでしょう。そんな彼の前に現われたのが、金髪の少年。「羊の絵をかいて」とせがむその少年こそ、タイトルにある「小さな王子さま」でした。彼は小惑星 B-612 にわがままな1本のバラの花を残して旅してきたのだといいます。飛行機の修理をする飛行士のそばで、王子は旅の途中に出会った奇妙な人間の大人たちや狐や蛇の話を語ります。二人きりの砂漠での時間、飛行士は彼の言葉に深くひかれてゆきます。

**When we had trudged along for several hours, in silence, the darkness fell, and the stars began to come out.**

.....  
**He was tired. He sat down. I sat down beside him. And, after a little silence, he spoke again:**

**“The stars are beautiful, because of a flower that cannot be seen.”**

**I replied, “Yes, that is so.” And, without saying anything more, I looked across the ridges of sand that were stretched out before us in the moonlight.**

**“The desert is beautiful,” the little prince added.**

**And that was true. I have always loved the desert. One sits down on a desert sand dune, sees nothing, hears nothing. Yet through the silence something throbs, and gleams...**

**“What makes the desert beautiful,” said the little prince, “is that somewhere it hides a well...”**

**I was astonished by a sudden understanding of that mysterious radiation of the sands.**

.....  
**“Yes,” I said to the little prince. “The house, the stars, the desert—what gives them their beauty is something that is invisible!”**

「ほんとうに大切なものは目に見えない」というフレーズは、王子が出会った狐が彼に語った言葉でした。ついに一滴の水もなくなってしまった飛行士と王子が探し当てた砂漠の中の井戸も、星に残してきた1本のバラに寄せる王子の思いも、「大切なもの」のモチーフとして作品に静かに響いていきます。その一方で、世界の現実には「大切なもの」を見つけられるのでしょうか。作者の痛烈なアイロニーが、大人の世界と「小さな」王子の存在の対照的なコントラストにこめられているのではないのでしょうか。

砂漠に不時着した飛行士の前に現われた不思議な少年、「星の王子さま」。  
「ほんとうに大切なものは目に見えないんだよ…」深い思いを遺して  
旅立っていった少年は、あなたの心に何を語りかけたのでしょうか。

As the little prince dropped off to sleep, I took him in my arms and set out walking once more. I felt deeply moved, and stirred. It seemed to me that I was carrying a very fragile treasure. It seemed to me, even, that there was nothing more fragile on all the Earth. In the moonlight I looked at his pale forehead, his closed eyes, his locks of hair that trembled in the wind, and I said to myself: "What I see here is nothing but a shell. What is most important is invisible..."

As his lips opened slightly with the suspicion of a half-smile, I said to myself, again: "What moves me so deeply, about this little prince who is sleeping here, is his loyalty to a flower—the image of a rose that shines through his whole being like the flame of a lamp, even when he is asleep..."

"Men," said the little prince, "set out on their express trains, but they do not know what they are looking for. Then they rush about, and get excited, and turn round and round..."

And he added:

"It is not worth the trouble..."

"The men where you live," said the little prince, "raised five thousand roses in the same garden—and they do not find in it what they are looking for."

"They do not find it," I replied.

"And yet what they are looking for could be found in one single rose, or in a little water."

"Yes, that is true," I said.

And the little prince added:

"But the eyes are blind. One must look with the heart..."

そして星をあとにして1年がたったある日、王子は意を決したように自分の花のもとに帰っていきます。自分がいなくなっても天空の星を見上げればその星の一つが微笑んでいるのだから、悲しまないで、と言いつつ、一筋の閃光とともに砂の上に静かに崩れ落ちるかのように姿を消してしまおうのでした。

哀しみをたたえながらも美しい余韻を残すこの童話の最後に、



砂漠の空に輝く一つの星の絵が描かれています。

「アフリカの砂漠に旅をすることがあったら、そしてこの風景の下で王子に会ったら、すぐに手紙を書いてほしい」、というメッセージとともに。

出典：The Little Prince/written and drawn by Antoine de Saint-Exupéry;  
translated by Katherine Woods (Penguin, 1962)

心でしか見ることができない。ほんとうに大切なものは目には見えない。

On ne voit bien qu'avec le cœur. L'essentiel est invisible pour les yeux.

Antoine de Saint-Exupéry (1900 – 1944)

アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリはフランスの作家です。彼はまたパイロットでもありました。代表作は『南方郵便機』(1929)、『夜間飛行』(1931)、『人間の大地』(1939)、『星の王子さま』(1943)など。なお『星の王子さま』は英語版とフランス語版が同時に出版されました。



アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリは、1900年フランス中南部の都市リヨンに貴族の子として生まれました。父は彼が4歳のときに他界、その後、一家は母方の大祖母の城館に移り住むことになります。

20世紀初頭、産業資本主義隆盛の時代にあつて、この城の中の空気は外界とは全く異なり、伝統を堅持する前近代的な時間が流れていました。そして城の菜園では、少年サン＝テグジュペリ自らも農夫さながら野菜を育てていました。「耕す」という彼にとって重要なテーマはここで育まれたのでしょう。

ところで彼には、この前近代的傾向とは一見対立するような側面があります。パイロットという側面です。飛行機は当時の産業発展の最先端に位置するもの、最も近代的なものでした。しかし、彼の中でパイロットであることと「耕す」人であることは深く結びついています。なぜなら、パイロットも農夫も共に「自然」を「耕す」からです。『人間の大地』の中で、飛行することは「耕す」ことに、パイロットは農民や庭師に、飛行機は鋤（うが）に譬（たと）えられています。農夫は土を耕すことで大地のあらゆる樹木につながり、一方パイロットは新たな航路を求めて生死を賭けた厳しい飛行を行うことで、自然と闘（たたか）う経験を通して、同じ思いを抱いた仲間一ひいては人類全体と一（ひと）目に見えない絆で結ばれていく、と彼は考えていました。これはお金では買えない「人間関係という贅（ぜい）沢」だと、サン＝テグジュペリは述べています。

そしてまた、人間は、人間に抗う自然との命がけの葛藤（かつとん）をするとき、初めて人間になる、と彼は言います。それゆえ、人間であるという生の実感を求め続けた彼の生き方は、傍目（はた目）には、ときに命知らずの、まるで死に突進していくような行為に見えました。事実、彼は、危険な飛行に挑戦し、危うく一命を取り留めるような経験を何度もしています。

そのような経験を通して、生を支える精神とは何なのか、彼は作品の中でも問い続けたのです。「目に見えないもの」をめぐる深い思索は、『星の王子さま』の中にも結実しています。

『星の王子さま』はイメージと共に生まれました。筆者が自らテッサンを描き、それと同時に文章も書かれていきました。そこで展開されるのは、イメージと共にある「子供の世界」です。それは、説明や「数」、ひいては商業主義・物質主義に支配された「大人の世界」に対置されています。「数」が重要な世界では、5000本のバラが1本のバラより価値があるのは当然です。また、バラは買ってくるもので育てるものではありません。しかし子供の世界では、バラはまずもって育てるものです。そこから、バラとバラを育てるもの間に、そして、この話を語る者と読む者の間に、目に見えないものが育まれていきます。

第二次世界大戦も終わりに近い1944年7月31日、サン＝テグジュペリを乗せた飛行機は行方不明になりました。長らく謎だった墜落場所については近年明らかになりましたが、原因については今なお不明です。しかし目的地については明らかだと、伝記作家ナタリー・デ・ヴァリエールは述べています。「飛行機に乗って、星の王子さまのように、自分の星へと旅立った。『今いるここよりはるかに、まぎれもなく真実だと思われる幼年時代の思い出の世界』へと。」

参考書籍：

サン＝テグジュペリ『星の王子さま』内藤濯訳、岩波書店、2000年

稲垣直樹『サン＝テグジュペリ 人と思想』清水書院、1992年

山崎庸一郎『サン＝テグジュペリの生涯』新潮選書、1971年

ナタリー・デ・ヴァリエール『「星の王子さま」の誕生』南條郁子訳、創元社、2000年